

◆教室を本でいっぱいにする——あらゆる手段で本を用意し、教室や学校内に置く

(1) 本の入手方法

朝の読書では、四原則の「(3) 好きな本でよい」に基づいて、読む本は生徒が自分で選んでいる。本の入手方法については、基本的には、生徒が自宅にある本を持つてくることを求めている。林公先生は「子ども自身が読みたい本を自分で持つてくるのが原則です」と述べており(⑤五七頁)。(⑥六三頁もほぼ同文。括弧内は本連載二月号で紹介した文献の番号と頁数を示す。以下同じ)、大塚笑子先生は、船橋学園女子高等学校の入学式の際に、生徒と父母に「毎朝、ホームルームで全校一斉の読書が行われていますから、そのための本を必ず一冊持つてきてください」と説明したと述べている(①八一頁)。

他方で、林先生は、学校(教室)に本を確保することが重要であることを指摘し、実行している。朝の読書について行ったことの一つとして、「教室には前もってできるだけたくさん生徒が読みそうな本をそろえておく」ことをあげ(③六〇頁)、教職員の「共通の努力目標として全員が心がけておく」ことの一つとして次の点をあげている(③五〇頁)。

「生徒が好んで読みそうな本を教室に備え付

31

朝の読書にどう取り組むか(4)

——具体的な指針の解説②

薬袋 秀樹

筑波大学大学院教授

けておく。図書室から学級文庫として各教室にまとめて貸し出してもらえるとよい」。

大塚先生も、「クラスには、クラス費で買った読書の本や、私が古本市で買った本、私の家から持ってきた本など一〇〇冊くらい常備して置いています」と述べている(⑦六頁)。

千葉県白井町立白井第二小学校では、次のような準備が行われている(②二九頁)。

②読むための本は、自分で選び用意する。

(a) 学校の本——図書室、各階廊下の書架、教室の文庫、町の図書館、移動図書館(さつき号)

(b) 自分の本

岡山県落合町立落合中学校では、次のとおりである(②一〇五頁)。

②読むための本は、生徒自身で選ぶ(自分で事前に選んでおく)

・読む本は、家から持つて来てもよい。

・図書館の本の貸し出しが始まったら、利用するようすすめる。

・図書館の本の一部を学級文庫として各教室へ移動し、本の準備ができていない生徒などへ貸し出しをする。

いずれも、(1)自分の本と家にある本、(2)学校にある本の二種類があげられており、とくに、学級文庫は不可欠である。

このように、生徒に自分で本を持つてきても

らうことを基本としつつも、学校に本を用意することが重視され、強調されている。これは、本を持ってこない生徒や忘れた生徒に読むための本を渡し、本を持ってくる生徒にも、本の不足を補い、読みたい本を見つけやすくさせるためである。したがって、朝の読書を進めるには、学級文庫などの本の用意が必要になる。とくに校区内に書店も公共図書館もない地域(⑫二四、五五頁)では、学級文庫と学校図書館が頼りである。本の用意は、相当部分が教師の個人的な努力によって行われているようである。

(2) 生徒による本の入手方法

生徒は、朝の読書のための本をどうやって入手しているのだろうか。書店と図書館では、書店での購入が多いという報告がいくつか見られる(⑫五七、六九、七〇、八三頁)が、学校図書館の貸し出しが増えたという報告もある(⑥一〇三、二〇八、⑫五四、九五頁)。

しかし、すべての生徒がすぐに本を持ってくるわけではない。林先生も、「本を持ってこない子(中略)が必ずいます」と述べている(⑤四一頁)。生徒の反応について述べている実践報告では、多くの場合、本を持ってこない生徒がいることが書かれている。「児童全員に本を準備させるのは容易ではありません」(②五一頁)、「本を忘れている子もいた」(⑥二二頁)、「本を持って来ない生徒が多くて困った」(⑫五

六頁)、「本を持ってこれられない子どもたちも少なくなかった」(⑬六五頁)という声がある。ある高等学校では、「本を持ってきていない生徒ははじめ半数くらいいました」という報告(②一九一頁)がある。このように、本を用意してこない生徒がいることは確実であるため、学校でも本を用意する必要がある。

(3) 学級文庫と学校図書館

学級文庫は重要であるため、多くの学校でその充実に努めている(②六九、一一三、一三一、一五六、⑥一四三、⑫三一頁)。しかし、本が少なく、また古い本が多いため、児童にとっては読みたいという意欲があまりわかない(⑬六七頁)など不十分な場合もある(⑬六五、九七頁)。そこで、学級文庫の確保のためには、それを支える学校図書館の支援が重要になる。学校図書館の整備も徐々に進んできている。林先生は、学校図書館との連携の意義について、次のように述べている(③六二、六三頁)。

「4 学校の図書館活動(特に司書教諭の役割)との連携によって『朝の読書』に活力を与え続けている例は多い。図書館の本を、学級文庫としてまとめて何十冊もすべてのクラスに貸し出す(中略)など様々な工夫が行われている。学校図書館や学級文庫の本が少ない場合、その不足を補うために、これまで、朝の読書に取り組む教師は、自分の持っている本を提供し

(①九一、⑦六頁)、自費で本を購入し、古書店で安い本を買い集め、資源回収の場で「御自由にお持ちください」と書かれてある本をもらってくるなどの涙ぐましい努力を行ってきた(⑫八二頁)。実践報告には、これらの具体的な事例が多数見られる。家庭からの寄贈をお願いし(⑫二八頁)、寄贈された本で持ち寄り文庫コーナーをつくっている例もある(⑬九九頁)。

学級文庫や学校図書館の本が足りない場合は、公共図書館の助けを借りることもできる。学期に一度、町の図書館に出かけて、子どもの手で学級貸出の本を借りている例(⑫二三頁)、県立図書館の移動図書館の巡回訪問を依頼している例(⑫四五頁)がある。

林先生は、生徒の読書環境について、「全校の児童生徒が一人残らず、それぞれ各自自分の好きな本を毎朝読むのですから、本がたくさん必要になるのは当然です」と述べているが、これは朝の読書の本質的な必要条件を示唆するものである。そして、足りない本を確保する方法が九項目あげられている(⑬四六頁)。ここでは、まとめとして、主な七項目を紹介する。

- ① 今ある図書室(学校中)の本を子どもたちが利用しやすいように整備し直す。
- ② 教師が自分の本や友人などから借りた本を教室の学級文庫に並べる。
- ③ 子どもたちが読み終わった自分の本と一緒に

置いて、誰でも借りられるようにする。

④保護者にも、家に眠っているいらなくなった本を寄贈してくれるように頼む。

⑤教師全員で本屋や古本屋をまわり、安くてよさそうな本をポケットマネーを出し合って買い、各教室の学級文庫に分ける。

⑥近くの公立図書館から、団体貸出で可能な限りたくさん本を学校に借りてくる。回転を速くすると、かなりの数の本を子どもたちの手の届くところに置ける。

⑦教師や保護者、場合によっては地域の人に呼びかけて、寄附やバザーの売上金などで本を買い、学校へ寄贈してもらう。

(4) 本を展示する方法

本を収集したら、生徒の目につきやすく、利用しやすい場所に置くことが重要である。林先生は、「廊下を歩けば本がどこにでもある」学校の夢を語っている(①一〇七頁)。葛飾区立上平井小学校では、「クレヨンハウス」等を参考に、学校図書館を明るく暖かみのある空間に改造したほか、図書館が三階にあるため、学級文庫を充実させるとともに、「より本を身近に感じる環境を作りたい」「本で子どもたちを覆ってしまおう」「一歩校舎に入れば、すぐそこに本がある」「そんな『本のある学校』」をめざして、階段の踊り場に本を展示する「読書コーナー」を設け、掲示板・廊下などにもどんど

ん本を展示している(⑭一三〇一九、六六〇七四頁)。このほかにも、廊下に書架を置いている学校がある(②二九、⑬七九頁)。

(5) 身近な場所に本の整備を

残念ながら、このような学校はまだ少数である。林先生は、「日本中どこへ行っても子どもの手に届くところに子どもが自分で好きな本を選べるだけの量の本がない」ことを指摘し、朝の読書にかかわるようになり、全国を駆け回って、初めてそのことを知ることができたと述べている(⑬二七頁)。これが日本の現実であり、とくに地域や学校によって大きな格差があると思われる。

朝の読書を円滑に進めるには、子どもの身近な場所に、子どもが読みたくなるような本を十分に整備することが不可欠である。

◆保護者にも説明し、理解と協力を求める

(1) 保護者への説明

朝の読書を始める際には、保護者への説明が必要である。日課表が変更になることを知らせ、生徒が読む本の入手に協力してもらう必要があるからである。ある小学校では、「保護者に理解を求め啓発するために学校便りや年度始めのPTA総会で『朝の読書』の取り組みを紹介した」(⑫三〇頁)、またある中学校では、「保護

者に対する啓発を保護者会や学校だより等を通して展開した結果、PTA本部を中心として大きな支持を受けた」と報告している(⑫四三頁)。ある高等学校では、「理事会と後援会(保護者会)にも賛同を求めたところ、ぜひやってほしいとの賛成を」得たほか、「保護者にも趣旨の説明を十分行うべき」だと考えて、始業式当日に「保護者あてに趣旨説明文を配布」している(⑥二二八、一三〇、一三二頁)。

全体での説明のほか、クラスでの説明も必要である。船橋学園女子高等学校では、入学式後のHRで、生徒と父母に、朝の読書について説明しているが、「父母の中には目を輝かせて、何度も何度もうなずいてくれる人もいて、大きな期待を寄せられていることを実感したという報告がある(①八〇〜八一頁)。

本の入手のための協力には、三つの方法がある。一つは、自分の子どものために本を購入してもらうことである。大塚先生は、高い本でなくともよいので、最初の本代だけは奮発してほしいとお願いしたと述べている(①八一〜八二頁)。本を好きになる子どもが増えるにつれ、子どもに本を買い与える保護者が増え始めたことが報告されている(⑬六五頁)。一つは、家庭で読み終わった本を寄贈してもらうことである。一つは、PTA・同窓会による支援である。「PTAが学級文庫の設置・充実を、同窓会

(中略)が学校図書館を支援」してくれたとの報告がある(⑫一〇三頁)。保護者の賛同を得て、クラスのホーム費の残金をホーム文庫の本代に充当した例もある(⑫一〇四頁)。

保護者の理解を得る方法として、一つは、授業参観の際に朝の読書を行うことがある(⑥一二〇～一二二頁、⑫二九、四六、⑭四〇頁)。生徒が静かに読書をする姿に対して、保護者から反響があった。また、もう一つの方法として、朝の読書に関する講演会を、教職員だけでなく、保護者有志にも聞いてもらうこともある(⑥二五〇～二五一頁、⑫一〇二頁)。

(2) 保護者による評価

朝の読書が広がると、生徒の生活が変わってくる。学校で本を読むようになると、家でも本を読むようになり、「本や読書の問題が家の中で多くなつて」くる(⑥一二二頁)ため、保護者がそのことに気づき評価するようになる。「朝の読書は、習い事だ塾だと忙しい子どもたちに、本を読む時間を確保し、読むきっかけを与えています。家庭でも読書の問題を通して親子のコミュニケーションを図ることができま

す。子どもが少しづつ落ち着いてきたという感想もあり、どの保護者も異口同音に朝の読書は歓迎だと述べている」という報告がある(⑬八九頁)。

船橋市立船橋中学校では、朝の読書が「家庭

での読書にもつながる」こと、それが「確かに、多くの生徒の中で見られる」ことを指摘し、朝の読書が始まってすぐ、保護者から「とてもいいことなので、もっと早く始めてくれればよかった」「うちの子がこの頃、本を読むようになった」「本屋によく行くようになった」という声があったことを紹介している(②八八頁)。ほかにも、保護者から感謝や支持の声が寄せられたという報告が多く(①一〇一、⑥二二八、⑫一〇五、⑬六六頁)、朝の読書を評価する保護者からの手紙も紹介されている(⑫二七頁)。

また、保護者同士や教師と保護者の間で読書が話題になるようになる。朝の読書を始めてから、「懇親会において本の話題で盛り上がった

(3) 親子読書への発展

朝の読書の活動は、とくに小学校では親子読書に発展することがある(②四〇～四三、⑬五五頁)。

千葉県大網白里町では、家庭で「親子の読書或は読み聞かせ」を行うことを、教師を通して保護者に働きかけており(⑥二五七頁)、朝の読書は「それぞれの子供の家庭にまで波及し、お母さんによる本の読み聞かせや親子読書にまで発展し、親子のきずなを深め、親子の関係に

も良い影響を与えています」と報告されている(⑫二六頁)。

葛飾区立上平井小学校では、朝の読書が発売点となつて、学校から家庭や地域へのつながりができている。保護者が地域の図書館からの毎月一回の団体貸出に協力する、読み聞かせボランティアの母親たちが教室で読み聞かせを行う、家庭での親子読書が進み、全校で六二%の親が読み聞かせをするなどの成果をあげている(⑫二九、⑭三三～三九頁)。

(4) 保護者による朝の読書の推進

一保護者(母親)が新聞広告で朝の読書を知り、自分の子どもの通う中学校にその実施を働きかけ、全校一斉の取り組みにつながった例がある(④)。また、一市民が、林先生の「朝の読書」推進講演会を開いて、県内の学校の教師に参加を呼びかけ、七八名もの参加を得た例もある(⑥一三六～一三七頁)。保護者は、朝の読書から多大な恩恵を受けることを考えると、このような取り組みをする価値は十分ある。これは、朝の読書に取り組んでいる教員にとっても心強いことであろう。

このように、保護者が理解し協力すれば、朝の読書はもっと円滑に普及するのではないだろうか。学校の外に目を転じて、保護者の理解と協力を求めることも重要である。

〔注〕自治体名、学校名は文献発表当時のものです。